

7/20（土）1学期中高終業式 校長挨拶

安全についてお話しします。1つは学校事故を忘れないことです。

2016年7月21日高校1年生の生徒が、ラグビー部の練習中に後頭部を打ち、急性硬膜下血腫で翌22日の朝、息を引き取りました。本校は命日7月22日を「いのちの日」としました。ご家族は二度と同じような事故が起こってほしくないと一心に願っておられます。黙とうを捧げます。一黙とう—

2つ目は子どもと大人、誰もが対等で尊重され、子どもはコミュニケーションや身体が未発達で、弱い立場にあることを忘れないことです。子どもは他の世界を知らないだけに、大人が想像する以上に孤立感に陥り自分を責めがちで、表現する方法も、言葉も持っていない場合もあります。ですから子どもをたった一人の人格として尊重し、決めつけずに向き合う必要があります。

猛暑により子どもたちは常に熱中症のリスクにさらされています。生徒自身が「体がなんかおかしい」と思っても伝えられず重症化することがあります。兆候が見られた時すでに遅く、突然意識を失う、けいれんなど急激に悪化し処置が遅れたことで死亡に至ることもあります。指導者や周囲の生徒が少しでも「まずいのでは？」と思ったら、迷うことなくその場で救急車を呼んでください。

合宿中にも事故は起こりやすく、環境の変化で眠れないなど体調が変わり心身の疲労もたまりやすくなります。特に新入部員に対して計画に無理がない吟味し、「疲れたから休みたい」と言う生徒の申し出や周囲の気づきを尊重できる体制をとってください。生徒も指導者もふだんより十分な休憩を取ってください。子どもの命は、いかなるルールよりも、大人の都合よりも、最優先されなければなりません。無知や驕りは恐ろしいもので、命はあっという間に消えてしまいます。そのことを忘れないで、私たち教員は知識をアップデートする余裕を作りサポートします。これでお話しを終わります。

7/22（月）追悼のことば

8年前の今日7月22日当時高校1年生の生徒さんが学校で起こった事故により亡くなられました。夏休み初日7月21日午前9時半過ぎラグビー部の練習中、グラウンドに倒れ、後頭部を打ちました。「大丈夫か」と問いかけられた直後は、応答ができていましたが、すぐ意識が混濁し、いびきをかき始めたため救急車を要請、病院に搬送され緊急手術を受けましたが翌朝死亡という事故でした。後頭部を打ってから10分以内救急隊が到着するまで顧問はラグビー部の備品のAEDを準備し、気道確保をして脈と呼吸を確認し、救急隊の到着を待ちました。医師の診断は急性硬膜下血腫でした。

いのちの日の今日、学校にお集まりの皆さま、登校はしていないけれどもそれぞれの場所で想っている皆さんとともに、偲ぶ時間といたします。どのような生徒だったのでしょか。

当時図書室司書の方は次のようにふり返りました。

「私が法政中高図書室勤務 7 年間で出会った中で、やはり頭の良いお子さんという印象です。毎朝新聞を読みに図書室を訪れていて他の生徒さんより少し大人っぽい、落ち着いた印象があります。中学時代はテニスの本を沢山借りていかれたことを覚えています。またジャンルに関わらず沢山の本を読んでいた印象があります。読む力が備わっていた生徒さんでした。」

自分の興味関心にそって多方面の本を沢山読み、物事を深く考えておられたようです。まさにこれから花が開こうとする時でした。

次に私たちが行ってきたことを述べます。

2018 年度中庭に追悼の碑が建立され、ご家族のご意向にそって、お子さんの幼い頃からの座右の銘とともに、誰かが誰かを思いやりという意味の「互いを思いやり」という言葉が碑文に刻まれました。この碑には、同様のことを二度と起こしてはならない、子を失う悲しみを他の誰にもさせてはならないと、願いが託されています。

2017 年度以降、私達教職員は日本体育大学スポーツ文化学部教授 南部さおり先生を招き研修を行っています。2023 年 10 月 20 日（金）日本体育大学 東京・世田谷キャンパス記念講堂で行われた研修会において、本校ラグビー部顧問 切刀康久先生が、当時の顧問という立場から、学校部活動の危険、生徒の命を守ることの大切さについて話されました。本研修は日本体育大学が「超本気」で取り組み続けている「命の授業」で、スポーツ指導者・教員を目指す学生、部活動事故や安全指導に関心のある方に広く開かれ続けられています。

2024 年 3 月 18 日（月）私たちは南部さおり先生を本校にお招きし他付属校にも呼びかけ、「ハラスメントとはなにか～部活動指導において具体的に学ぶ」というテーマで研修を行いました。直面しがちな場面についてグループワークを行い、顧問は何をしてどのような結果に至ったか事例から学びました。

さらに 2024 年 6 月 29 日（土）本校保健室蛭田絹子、小平昭子両先生は都内の養護教諭に呼びかけ、「東京私立学校保健研究会」という都内の私立中高の養護教諭の研究会で、南部先生の講演会を開きました。86 名が参加して、頭部外傷と熱中症について学び、学校に持ち帰って共有したいという感想も多くありました。

2024 年 7 月 5 日（土）～7 月 7 日（月）中高ラグビー部員および顧問が日本赤十字協会救命講習を受講しました。中学 1 年生・高校 1 年生対象救命講習会は 12 月を予定しています。

知らないことは恐ろしいことで、生命はあっという間に消えてしまいます。最新の正しい知識を把握し、1. 意識確認 2. 呼吸確認 3. 救急車・AED 要請、これらを 1 秒でも早く行動に移す訓練を行い、緊急事態にどう対応すればよいのか、あらかじめ意識するための研修を続けます。

また 2023 年度三付属校の部活動検討チームで検討を行い、2024 年度 6 月「法政大学付属校クラブ活動ガイドライン」を策定しました。今後各校ガイドラインを作成し公表、点検を

行い生徒にとっても教員にとっても持続可能なあり方を目指します。本校では7月20日公表し、この夏はこのガイドラインでやってみましょうということにしました。

最後に決意を述べます。皆でやれば学校の安心安全は成し遂げられます。たとえ小さなことからでも、1人ひとりが安全のためにできることを行い、人を攻撃するのではなく思いやりと対話で関係を作ることが、生徒1人ひとりの最善の利益につながります。世界は戦争・紛争が絶えず、SNSは便利だけれど睡眠不足やコミュニケーション上のトラブルや攻撃など生きづらい世の中です。困難な時だから互いの安全を守る発想への転換が大事と「追悼の碑」は教えてくれているように思います。生徒1人ひとりみんな違います。リテラシーを学び、それぞれが感じることを大切に行動しましょう。子どもの感性は輝きに満ちています。このつどいについても、「このような形の方が当事者意識を持てるのでは」など新しい意見がありましたら生徒の皆さんから先生方にお寄せください。

8年目の追悼のつどいにあたり、亡くなった生徒さんの御霊に心から哀悼の誠を捧げます。亡くなったという事実を記憶に留め、このような悲しいできごとを今後起こさないという決意を全教職員が持ち、安心安全の環境づくりをめざします。

南部先生は次のように述べています。

「良い指導をされた生徒が、良い指導をする正の連鎖もあります。暴力指導の負の連鎖のルーツをたどれば軍隊教育にまで遡る、と言われていています。日本固有の悪しき遺残物は、今すぐ、きっぱりと断ち切らなければなりません。そのためにも、曇りのない目を持ち、新しい風をまとった若い先生が、大いに活躍できることと、活躍できる場が用意されることを願ってやみません。」

南部先生のこの教えを胸に刻み、思いを同じくするラグビー部員・卒業生・関係者をはじめ本校構成員の皆さんと共に力を尽くすことを誓います。

2024年7月22日
法政大学中学高等学校
校長 松浦麻紀子